琉球大学学術リポジトリ

［報告］ヴィクトリア大学での日本語教育実習の報告

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学留学生センター
	公開日: 2009-04-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 渡真利, 聖子, Tomari, Seiko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9534

琉球大学留学生センター紀要
留学生教育　第6号，2009

ヴィクトリア大学での日本語教育実習の報告

渡真利　聖　子

0. はじめに

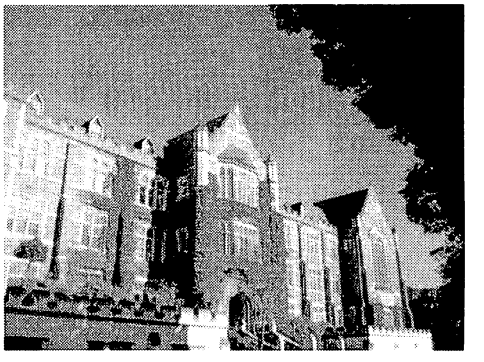
ニュージーランドのVictoria University of Wellington（以下、ヴィクトリア大学）の日本語プログラムでは、将来日本語教育に携わろうという意志のある者、主に日本語教育学専攻の大学院生のために、日本語教育の実習の場として、日本語のチュートリアルクラスを提供しており、そのクラスを担当する者を毎年日本の大学から1人採用している。私は2007年度の実習生として採用され、2007年２月から2007年10月までの８ヶ月間実習を行った。本稿は、ヴィクトリア大学の日本語プログラムの紹介と私がチューターとして実践したことやそれを通して学んだことの報告である。

1. ヴィクトリア大学

1. 1 概要と環境

ニュージーランドの首都ウェリントン市にあるヴィクトリア大学は、学生数21,889人（2007年度）の国立大学である。学部は、Architecture and Design、Humanities and Social Sciences、Law、Science、Engineering、Education、Commerce and Administrationの全７学部からなり、ニュージーランド各地から集まった学生が学んでいる。自宅通学の学生もいれば、寮に入ったりフラットを借りたりする学生もいる。大学への交通手段として自家用車や電車、バス、ケーブルカーなどを利用している。

キャンパスは全部で４つ、すべてウェリントン市内にあり、各キャンパスは徒歩や公共のバスで行き来できる距離にある。日本語プログラムがおかれているアジア・ヨーロッパ言語文化学科はKelburnキャンパスにあり、ウェリントンの繁華街からさほど遠く離れていないにもかかわらず、自然に囲まれ静かで落ち着いた環境にある。Kelburnキャンパス



ヴィクトリア大学
Kelburnキャンパス　Hunter棟

は４つのキャンパスの中で最も大きく、図書館や各種学生サービスセンターのほかに、購買部、カフェテリア、銀行、旅行会社などが備わっている。

1.2 学年暦

ヴィクトリア大学は３学期制であるが、日本語プログラムの授業が開講されるのは１学期目と２学期目だけである。したがって実質３学期目は夏季休暇の期間となる。2007年度に日本語プログラムの通常の授業が行われた期間は、１学期目が２月26日～４月５日／４月23日～６月１日（12週間）、２学期目が７月９日～８月17日／９月3日～10月12日（12週間）で、各学期終了後に4週間の試験期間がある。１学期目の試験期間後は1週間の冬季休暇Mid-year breakがあり、２学期目の試験期間後にも同じく１週間の夏季休暇End of year breakがある。その他それぞれの学期中にも２週間の中休みMid-trimester breakが入る。以下は2007年度の学年暦である。

2月19日 ～ 2月25日	授業登録期間
2月26日	１学期授業開始
4月 6日 ～ 4月 9日	（公休日）Easter
4月 9日 ～ 4月20日	１学期中休み Mid-trimester break
4月23日	１学期後半授業開始
4月25日	（公休日）Anzac Day
6月 4日	（公休日）Queen’s Birthday
6月 4日 ～ 7月 1日	試験期間
7月 2日 ～ 7月 6日	（冬季休暇）Mid-year break
7月 9日	2学期授業開始
8月20日 ～ 8月31日	２学期中休み Mid-trimester break
9月 3日	２学期後半授業開始
10月15日 ～ 11月11日	試験期間
11月12日 ～ 11月16日	（夏季休暇）End of year break
11月19日	３学期授業開始 ※日本語プログラムの授業は開講されない

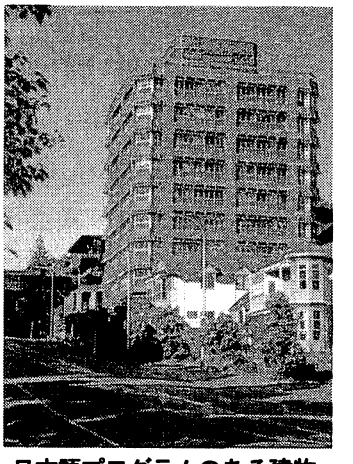
1.3 授業形態　― 講義とチュートリアル

授業形態には講義とチュートリアルの２種類ある。講義が１クラス100分、チュートリアルが１クラス50分である。学部の日本語の授業にはすべて、講義の時間とチュートリアルの時間が設定されており、学生たちは両方の時間に出席しなければならないことになっている。私が担当した日本語のチュートリアルは少人数（10人前後）で行われていた。特に語学である日本語科目においては、大人数の講義クラスではなかなかできない、ロールプレイ活動などを通して、会話の練習をさせたり、一人ひとりの質問に答えたりしてできるだけ細かく対応することが日本語チュートリアルの目的であった。チュートリアルの具体的な内容については、後の「3.1 担当した授業」で述べることにする。

2. 日本語プログラム

2.1 概要

ヴィクトリア大学に日本語プログラムが開設されたのは1989年で、ニュージーランド国内の大学の日本語教育機関の中では比較的新しい。2007年度は、４人の専任講師と６人の非常勤講師（日本語教育実習生も含む）がおり、学生数は約250人であった。私がいた2007年度は、明治学院大学、大阪外国語大学（現、大阪大学）、立命館大学、学習院大学、同志社大学、立教大学、早稲田大学の７大学と国際交流協定を結んでいたが、現在（2008年）では、国際教養大学、関西大学も加わり交流を持っているそうだ。毎年ヴィクトリア大学から数名の学生が、１年間の交換留学プログラムでこれらの大学へ留学している。



日本語プログラムのある建物
von Zedlitz棟

授業は、日本語科目以外にいくつか日本関係の授業も開講されており、文学や歴史、社会文化などについても学ぶことができる。以下は2007年度に開講された日本語プログラムの授業の一覧である。

100-Level Courses	
JAPA 111	Introduction to the Japanese Language
JAPA 112	Elementary Japanese Language
JAPA 104	Japanese Language 1
200-Level Courses	
JAPA 201	Japanese Language 2
JAPA 211	Modern Japan
300-Level Courses	
JAPA 301	Japanese Language 3A
JAPA 302	Japanese Language 3B
JAPA 311	Japanese Intellectual History
400-Level Courses	
JAPA 401	Advanced Japanese Language
JAPA 403	Modern Japanese Literature & Religions
JAPA 404	Japanese Intellectual History
JAPA 406	Special Topic: Introduction to Japanese Sociolinguistics
JAPA 489	Research Essay

上記のうち、それぞれのコースにおける基礎的な科目は、JAPA111／112、JAPA104、JAPA102、JAPA301／302、JAPA401で、学生は自分に合ったレベルからスタートすることができる。日本語専攻で卒業するには、JAPA200～399の科目の中から、計114単位を取得する必要がある。その後さらに勉強したい学生は、試験を受け、条件を満たしていれば400レベルのオナーズコースに進む。2007年度は２名の学生がオナーズコースで学んでいた。

2.2 学 生

高校までにすでに日本語を学び、初級後半のコースJAPA104からスタートする者も多い。日本語の授業を受講する学生は、実際には日本語を専攻しながら他に複数の専攻を持っている学生も多い。Humanities and Social Sciences、Law、Commerce and Administrationなどの学部の選択科目にもなっているため、クラスにはさまざまな専攻の学生たちがいた。

日本語レベルに関しては、学部の一番上の300レベルコースで、日常的な会話や簡単な口頭発表、自分の意見を述べたりすることは問題なくできるようになる。ニュージーランドは英語圏であるため漢字に対しての壁はあるが、中級レベルの読解、小論文、翻訳などの読み書き能力もつくような授業内容になっている。学部卒業時には日本語能力試験２級程度のレベルに達する。卒業後の進路希望としては、日本へ行って仕事がしたい（特に英語を教えたい）という声やJETプログラムに参加したいという声が多かった。

2.3 琉球・沖縄関連教育

JAPA301-Japanese Language 3Aの授業の中では、テレビドラマ『瑠璃の島』（2005）を教材に、実際にドラマを視聴しながら物語の内容をよみ取ったり、使用されている日本語を学んだりする時間がもうけられており、それを通して学生たちは沖縄の離島の生活を知ることができるようになっていた。

また、JAPA311-Japanese Intellectual History（日本思想史）の授業の中では、琉球・沖縄史についてもとり上げられるので専門的に学ぶことができる。一度、私も20分ほど時間をいただき、琉球方言について簡単に紹介した。話をする前は興味を持ってくれるか心配もしたが、すでにレポートのテーマを「琉球語と日本語の関係」と決め、関連する本を読んでいた学生がいたのには感心した。大学図書館には琉球・沖縄関係の基本図書も備わっており、学生たちが自ら沖縄に関して調べられる環境になっている。

3. 日本語教育実習

ここでは、私が担当した授業の内容と、授業外の時間に行ったことや学生との関わりなどについて述べる。

3.1 担当した授業

私が担当した授業は学部生のためのチュートリアルである。100レベルから300レベルの基礎的な日本語科目で、１学期から２学期の期間の計６科目であった。時間割は以下の通りである。

[2007年度１学期]

	月	火	水	木	金
9:00～9:50	JAPA201(Tut1)		JAPA111(Tut1)		
10:00～10:50	JAPA201(Tut2)	JAPA301(Tut1)	JAPA111(Tut2)		
11:00～11:50		JAPA301(Tut2)	JAPA111(Tut3)		
12:00～12:50		JAPA301(Tut3)	JAPA111(Tut4)		
13:10～14:00	JAPA201(Tut3)			JAPA104 (Tut3)	
14:10～15:00	JAPA201(Tut4)			JAPA104 (Tut4)	
15:10～16:00				JAPA104 (Tut5)	

[2007年度２学期]

	月	火	水	木	金
9:00～9:50	JAPA201(Tut1)				
10:00～10:50	JAPA201(Tut2)	JAPA302(Tut1)			
11:00～11:50		JAPA302(Tut2)			
12:00～12:50		JAPA302(Tut3)			
13:10～14:00	JAPA201(Tut3)			JAPA104(Tut3)	
14:10～15:00	JAPA201(Tut4)		JAPA112(Tut1)	JAPA104(Tut4)	
15:10～16:00			JAPA112(Tut2)	JAPA104(Tut5)	

チュートリアルは少人数で行うため、講義のクラス数に比べてチュートリアルのクラス数は多くなる。気をつけなければならないのは、１つの科目のそれぞれのチュートリアルクラスで活動内容に差が出ないように進めることである。授業は、それぞれの科目の、講義担当の専任講師と相談しながら進めた。

3. 1. 1 JAPA111／112チュートリアル

①期間：JAPA111　１学期目、週１回／JAPA112　２学期目、週１回

②対象：初級前半レベル。JAPA111は日本語初心者の学生。

JAPA112はJAPA111受講済みの学生、またはそれに相当する日本語レベルの学生（NCEA Level２または6 th Form Certificate合格者など）。

③教科書：『初級日本語げんきⅠ』（The Japan Times）

④チュートリアルの内容：講義の時間に教科書の「会話・文法編」で文法事項の確認や簡単な練習をしているので、チュートリアルではそれをさらに定着させるためにゲームなどの活動を取り入れたり、教科書の「読み書き編」を解かせ全員で確認しあったりした。時間があれば自習・宿題用の『初級日本語げんきワークブック』のチェックや学生からの質問に答えた。毎回、授業はじめの10分で、講義担当の専任の先生が準備してくださったひらがな・カタカナ・漢字のクイズを行った。２学期目のJAPA112からは時々コンピュータを使用し、発音練習も取り入れた。また、両学期にそれぞれ２回オーラルテストを実施した。

⑤クラスの様子・その他：JAPA111は約120名の学生が登録し、計８クラス、JAPA112は約60名で計４クラスであった。私は、そのうちの半分（JAPA111の４クラスとJAPA112の２クラス）を担当し、残りのクラスは他のチューターが受け持った。

ゼロスタートのクラスのため、他のレベルに比べると教える側も多少英語力を要する授業であった。その点でさまざまな母語話者が１つのクラスで学んでいる日本国内での日本語教育との違いを一番感じる授業であった。不安も大きかったが、授業の進め方など専任の先生に細かく教えていただいたり、時々他のクラスのチューターの先生と情報交換をしたりして、とても学ぶことの多かった授業である。

ランゲージ・ラーニングセンターのコンピュータ教室での授業だったため、発音練習やオーラルテストはコンピュータを利用することができた。使用する音声ファイルの準備、オーラルテストの採点は専任の先生がしてくださったが、練習やテストを実施して実際にCALLシステムを取り入れた語学教育に触れられたことは、私にとってとてもいい経験になった。

3.1.2 JAPA104チュートリアル

①期間：１学期目～２学期目、週１回

②対象：初級後半レベル。JAPA112受講済みの学生、またはそれに相当する日本語レベルの学生（NCEA Level 3またはBursary in Japanese合格者など）。

③教科書：『初級日本語げんきⅡ』（The Japan Times）、ヴィクトリア大学オリジナル会話教材

④チュートリアルの内容：50分のうち、始めの15分～20分は、大学オリジナルの会話教材をもとに学生がペアでインタビューしあいながら、できるだけ日本語で会

話する時間をもうけた。会話トピックは、例えば「私の家族」、「ウェリントンでの生活」、「日本とニュージーランドの食べ物」、「10年後の私」など身近なものが取り上げられていて、毎回一つのトピックについて学生自身の体験や考えが話せるようになっていた。後半の30分はJAPA111／112と同じく、講義の時間に教科書の「会話・文法編」で文法事項の確認や簡単な練習を行っているので、チュートリアルはその課の「読み書き編」をもとに進めた。

⑤クラスの様子・その他：約70名の学生が登録し、計５クラスであった。私は、そのうちの３クラスを担当し、残り２クラスは他のチューターが受け持った。

このレベルになると、JAPA112から上がってきた学生もいれば高校までに日本語を勉強してきた学生の割合も多くなり、それぞれの学生が１つのクラスで学ぶことになる。高校で日本語を勉強してきた学生の中には留学経験をすでに持っている人もいて、特に会話力や聴解力の面では学生の間で差が見られた。そのため学習歴の浅い学生が取り残されないよう会話練習の活動などには配慮が必要だった。その一方、学生同士教えあう場面もあり、私のほうも授業を進める上で助けられ、学生から学ぶことも多かった。週に１度、講義担当の専任の先生と他のチュートリアルクラス担当のチューターの３人で情報交換の時間をもち、学生の様子を報告したり授業のアドバイスをいただいたりした。

JAPA104の学生
コース終了後の食事会

3. 1. 3 JAPA201チュートリアル

①期間：１学期目～２学期目、週１回

②対象：中級レベル。JAPA104受講済みの学生、またはそれに相当する日本語レベルの学生。

③教科書：『中級の日本語』（The Japan Times）

④チュートリアルの内容： 講義の進度合わせて、教科書の中の「運用練習」のセクションを担当した。教科書にそってロールプレイをさせたり、ディスカッションさせたりして、会話能力を高める活動を中心に行った。チュートリアルで扱った練習のいくつかは、期末のオーラルテストにも出題された。その他に聴解の時間

として、各学期全11回の授業のうち４、５回はビデオ鑑賞を行った。１学期目はアニメ『セロ弾きのゴーシュ』（1982）、２学期目は映画『Shall We ダンス?』（1996）を鑑賞した。また、「運用練習」の中の400字程度の作文課題は宿題とし、次回の授業で提出させ、添削後学生に返却した。

⑤クラスの様子・その他：約35名の学生が登録し、計４クラスであった。授業はほとんど日本語で進められ、このレベルになると学生たちもいろいろな話ができるようになっていた。時には、学生のほうから日本へ行った経験を話してくれたり、ニュージーランドのことを話してくれたりする中で、文化の違いや大学生活についてなどクラス全体でディスカッションができた。授業は、ロールプレイでの会話練習が中心で、教科書に出てくる表現以外の語彙表現も紹介するようにした。ビデオ鑑賞はスクリプトと翻訳を配布し、話の内容を確認したり、所々にディクテーションを入れたりしながら進めた。

各学期末には講義担当の専任の先生と協力してオーラルテストを実施した。テスト内容は、１学期が①文章の音読と内容説明、②チューターに日本での大学生活についてインタビューする、③自分の大学生活について質問に答える、２学期が①文章の音読と内容説明、②電話で日本語のプライベートレッスンの依頼をする、③お世話になった方へお礼の電話をかける、というものであった。オーラルテストの試験官は初めてだったので、進め方や採点の仕方などを学ぶことができていい経験であった。

3. 1. 4 JAPA301／302チュートリアル

①期間：JAPA301　１学期目、週１回／JAPA302　２学期目、週１回

②対象：中上級レベル。JAPA201受講済みの学生、またはそれに相当する日本語レベルの学生。

③教科書：ヴィクトリア大学オリジナルテキスト

④チュートリアルの内容：JAPA301、JAPA302ともに同じ流れで進めた。50分のうちはじめの15分を学生のスピーチの時間にとり、残りの時間を会話練習の時間とした。スピーチは毎回１人または２人ずつ自由なテーマで５分間発表してもらい、発表の後は10分ほど質疑応答やディスカッションの時間とした。その後、大学オリジナルのテキストをもとに毎回１つのトピックについてペアで質問しあったり、クラスでディスカッションをしたりするなどの会話練習を行った。トピックは

「旅行の計画」、「科学の進歩と人間」、「若者」、「外国人が見た日本」、「理想の人は？」などバリエーションに富んでいた。各学期末には、ドラマの発表会も行った。

⑤クラスの様子・その他：約25名の学生が登録し、計３クラスであった。スピーチは学生たちが自分の経験や興味のあることについて話してくれたので、私も勉強になり、この時間がとても楽しみであった。スピーチの前にはほとんどの学生が原稿のチェックをしてもらいに来たり質問に来たりして、熱心に取り組んでいた。

JAPA302ドラマ発表会

発表はパワーポイントを上手く使い、聞いている人にも分かりやすいよう工夫していて感心させられた。毎回、発表者一人ひとりの評価を出し、次の時間にその評価シートを渡してフィードバックした。

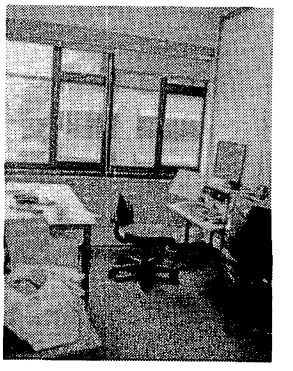
会話練習では、導入として私がトピックに関して情報を与えたり少し解説を行ったりしてから、ディスカッションに入った。300レベルのコースだけあり、学生たちは日本語で自分の意見や気持ちをしっかり述べることができていた。トピックについての興味関心度や背景知識は学生によって差があるため、導入でどのような情報を与えたらよいか、どうしたらディスカッションが盛り上がるかなど、その準備には最も時間をかけた。授業後には毎回、講義担当の専任の先生に内容を報告して、助言をいただいたり、学生の様子などの情報を交換したりした。

各学期末に行ったドラマの発表では、まず３～４人のグループを自由に作らせ、ストーリー作りから練習まで各グループの自主性にまかせた。これも一人ひとりの評価を出すのには時間がかかったが、それぞれのグループがアイディアを練ったおもしろい発表だった。

3.2 チュートリアル以外の時間

チューターにも、２、３人共用ではあるが個室が与えられ、授業以外の時間はほとんどそこで過ごした。授業の準備はもちろんのこと、テスト・クイズの採点、スピーチ・ドラマ・提出物の評価、スピーチの原稿チェックなどが私の仕事であった。時々学生が質問しに直接部屋を訪れたりメールを送って来たりするため、それに対

応しているとあっという間に時間は過ぎていった。忙しい時間ではあったが、チュートリアルだけでは気づかない学生の様子が把握できたので私にとってそれらも貴重な時間であった。学生が来たときは、日本から持っていった写真や本、CDなどを見せたりすると関心を示してくれた。



チューターの控え室

4. その他

4.1 設備について

1）ランゲージ・ラーニングセンター

日本語プログラムと同じ建物にある外国語教育のためのセンターで、ヴィクトリア大学で学べる言語を中心に約50言語の学習教材を有している。長期休暇中も月曜日から金曜日まで利用でき、教材は本や雑誌、ビデオ、DVD、コンピュータ教材など充実している。日本語の教材も多く、サテライトコーナーではNHKの国際放送「NHKワールド・プレミアム」を視聴することができる。

コンピュータ室やオーディオスペースなど部屋もいろいろなタイプがあり、予約すれば授業で使うこともできる。JAPA111／112やJAPA104はここのコンピュータ教室で行った。

また、Language Buddy（琉球大学でいう「学生チューター」のようなもの）を希望する学生は、このセンターに申し込めば、Language Buddyになってくれる日本人留学生を探してくれる。日本語のLanguage Buddyは比較的人気があったようだ。

2）日本語図書室

大学の図書館にも日本語に関する本やビデオ・DVDはもちろんあるのだが、それとは別に日本語プログラムのフロア内には日本語を学ぶ学生のための日本語図書室がある。寄付された図書など、日本語の教科書から辞書、小説やマンガの文庫本、雑誌までスペースは小さいながらもさまざまな本がそろっている。学生たちがよく空き時間に自習していたり、おしゃべりしたりしていた。私も授業の教材集めで利用した。

日本語図書室

3）Blackboard（電子掲示板）

学生たちは、インターネットを通じて、受講している科目の電子掲示板がチェックできる。このBlackboardには授業の内容や自習用の教材、テストやクイズの告知など、講義に関する全ての情報が掲示されているので、授業に出席できなかった学生も大切な連絡事項を確認できるようになっていて、とても便利なシステムである。

4.2 日本語・日本関係のイベント

日本語プログラムでは「日本語・日本文化セミナーシリーズ」と題して日本映画の上映や研究発表などを開き、学生たちが気軽に日本語や日本文化に触れられる機会をもうけている。2007年には日本語や日本文化に関心のある学生たちによって日本クラブJINZAも結成され、お花見会や日本の方言の勉強会を開いたりして積極的に活動をしていた。

また、大学の近くにある日本国大使館でもいろいろな催し物があった。例えば毎月の無料映画上映会をはじめ、2007年度は生け花のデモンストレーション、書道の展覧会、専門家によるアニメについての講演、また、日本人音楽家によるコンサートなど沖縄にいてもなかなか見られないようなイベントがあり、ウェリントンの人々は意外にも日本に触れるチャンスに恵まれているように感じた。

5. おわりに

ヴィクトリア大学での日々を振り返ってみると、この短い8ヶ月の間にたくさんの新しいものに触れ、こんなにいろいろな経験をしたのかと驚いてしまう。実習を始める前に、ある先生から「授業をこなすことも大切だが、学生たちと年齢も近いのだから授業外でも仲良くし、学生が日本語で気軽に話してくれるような関係を作って、あなた自身もここでの生活を楽しみなさい」と助言を受けた。ヴィクトリア大学には日本人留学生もたくさんおり、積極的な学生は日本人学生らと交流を持っていた。しかし、日本語を学ぶ学生全員が日本人と接する機会はそう多くはなく、やはり学生たちにとって彼らの年齢に近い一番身近な日本人は私なのである。それに気づいた時、前に先生のおっしゃったことの意味がよく理解でき、それが日本語教育実習生の役割の一つでもあると実感した。実際、学生たちは、日本語だけではなく、やはり日本のテレビや音楽、マンガ、ゲーム、ファッションなど若者に人気のあるものには目を輝かせ、自分たちと同じ年代の日本人が今どんな生活を送って

いるかということについてとても興味を持っていた。食べ物なども含め、たいていの日本のものには好意的であるように感じられた。学校以外でも食事や買い物、カラオケなどに誘ってくれて、おかげで私もウェリントンでの生活を楽しく送ることができた。このように学生たちと接する中で、海外で日本語を学ぶ人たちが何を求め、どんなことに興味を持つのか垣間見られたのもいい経験であった。日本へ来ることを望んでいた学生たちとは、いつか日本で再会できることを期待していたが、早くも、２人の学生から「2008年度のJETプログラムのALTに合格した」と連絡が来た時はとても喜んだ。

今回は、私にとって初の海外での日本語教育だったのに加えて、初の長い海外生活でもあったため、出発前は不安でいっぱいだったが、いざ生活が始まればすべての新しい体験がとても新鮮で喜びを感じることのほうが多かった。そう感じられたのも、日本語プログラムの先生方や学生たち、ホームステイ先の方が大学の中だけでなくプライベートでもいろいろ支えてくださったおかげである。この場をかりて皆さんにお礼を申し上げたい。

このような機会を与えてくださったヴィクトリア大学の伊藤雄志先生と琉球大学の金城尚美先生、狩俣繁久先生にはとても感謝している。2008年度も琉球大学からヴィクトリア大学へ実習生が派遣されたのは私にとっても大変うれしいことである。この日本語教育実習生の派遣を機に、これから琉球大学とヴィクトリア大学の交流がますます深まることを願っている。

（琉球大学留学生センター非常勤講師）